

待ち望む再会

香月美夜



## 待ち望む再会

「マインが来ないわ、イルゼ」

ギルベルタ商会で倒れたマインが家に帰ってからもう十日が経っています。それなのにマインはまだ来ません。わたくしは夕食の下ごしらえのため、助手に指示を出し始めたイルゼに向かって唇を尖らせます。イルゼは塩や香草を取り出しながら口を開きました。

「あの子は南に住んでるんだらう？ だったら、冬支度の追い込みで忙しい時期だよ。金持ちの多い北と違って自分達で全部準備するんだからさ」

ルツツやマインは自分達で薪を準備したり、蠟燭や保存食を作ったりするとイルゼから聞いて驚きました。オトマール商会の冬支度はダプラの分も含めるため、従業員が総出で行いますが、購入して済ませる物が多いのです。

「一言で冬支度と言っても、住んでいる場所ですいぶん違うのね」

「それに、もう雪が降り始めてる。家に籠り始める人が出てくる時期だ。マインは身食いの症状がなくても夕食に出られないくらい虚弱だったじゃないか。春までは来られないと言われたなら春まで待つしかないよ」

「それはそうですけれど……」

わたくしは身食いに起こること、命の期限、回避策をマインに教え、家族で話し合うように伝えまし



た。マインの命いのちに関かわることです。契けい約やくしてくれる貴族きぞくを探さがすにしても、時じ間かんがあれば貴族きぞくの方々かたがたと交こう渉しょうできる余地よちが広ひろがるので、できるだけ早はやく行こう動どうを起おこしたいと思おもっています。

「早はやく来きてほしいわ。マインの知ち識しきを我わが家やでお金かねに換かえれば、契けい約やくする貴族きぞくに交こう渉しょうして少すこしは待たい遇ぐうを良よくしてもらうこともできるかもしれないもの」

貴族きぞくと交こう渉しょうするためにはオトマール商しょう会かいと貴族きぞくの繋つながりが非ひ常じょうに重じゅう要ようになります。ギルベルタ商しょう会かいは本店おとだなとして認みとめられ、貴族きぞくとの取とり引ひきが始はじまつてからまだそれほど経たっていない新しん興こうの店みせです。まだまだ貴族きぞくと交こう渉しょうできるほどの繋つながりはありません。マインが少すこしでも良よい環かん境きやうで生いきていこうと思おもえば、今いまのギルベルタ商しょう会かいでは力ちから不ぶ足そくなのです。

「ぐずぐずしていたら交こう渉しょうする時じ間かんもなくなってしまうわ。そんな簡かん単たんなことがマインにわからないはずがないのよ。それに、あれだけ仲なかが良よかったのですもの。ご家か族ぞくもマインを死しなせたいとは思おもっていないはずなのに……。本ほん当とうに春はるまで来こないつもりなのかしら？」

「さあね。あの子このことはあの子こが考かんがえることだよ。お嬢じょう様さまはこれでも食たべて落おち着ついたらどうだい？」

イルゼが改かい良りようしたカトルカールを食たべて、ふうと息いきを吐はきます。

「……イルゼは本ほん当とうにいいカトルカールを作つくれるようになったわね。マインにも食たべさせたいわ」

「そうだね。アタシもあの子こに聞ききたいことがあるよ」

イルゼは助じ手しゅの持もってきた肉にくを台だいの上うへに置おいて、塩しおをかけ始はじめました。肉にくに塩しおが揉もみ込こまれていきま

す。わたくしはその様よう子すを見みながら、「わたくし、マインと一緒に貴族街きぞくがいへ行いきたいのよ」と呟つぶやきました。

「一緒いっしょに行いったところで、主あるじが違ちがえば簡かん単たんには会あえないけどね。……アタシが知しってるのは下した働はたらきの事じ情じようだけだから、身み食くいがどういふ扱あつかいになるのか知しらないけどさ。一ひとり人で生せい活かつできる離はなれを得えられる愛あい



妾と、ただ契約しただけの身食いが同じ扱いにはならないんじゃないかい？」  
わたくしが厨房へ出入りしてイルゼと話をする事が多いのは、イルゼが貴族街で働いていたことがあるからです。そのため、下町から貴族街へ行く者の事情を多少なりとも知っています。イルゼはわたくしが成人した時は一緒に貴族街へ向かうか、年齢的に難しいならばそのための後任を育てるかをおじ様に任されているのです。

「でも、死ぬよりはいいでしょう？ それに、マインの知識をこちらに売ってもらえばオトマール商会からマインに援助できると思うの」

「ああ、確かどこかの商会在マインの知識を独り占めしてるって言ってたね？」

「そう、そうだね！」

わたくしはポンと手を叩き、その後、ひどく嫌な気分になりました。

「マインがウチに来たがっているのに、きつとベンノさんが邪魔をしているのよ。……身食いが生きていくには貴族と契約するしかないもの。それなのに、マインをウチに超越さないなんて、ひどいわ」

肉に塩を手際よく塗り込んでいたイルゼが眉を片方だけ上げました。

「勝手な想像は止めな、お嬢様。そんなにひどい状況ならマインがこっちに助けを求めるはずさ。お嬢様が言ったように、あの子はそんなに馬鹿じゃない。春になったら来るさ」

「……そうね」

「カトルカールの味が良くなっているから、アタシも会いたいね。あの子はきつと別のレシピも色々知っているはずなんだ」

イルゼが緑の目を細め、グニグニと香草を揉み込みながらそう言いました。イルゼがマインと一緒に



いたのはカトルカール作りをした時だけです。それなのに、何故そんなことを言い切ることができるのかわかりません。

「イルゼはどうしてそう思うの？」

「マインの食事の減り方を考えると、そういう結論になるんだよ。いつもスープだけ残していたから野菜が苦手なのかと思ったけど、他の料理では食べてた。何かおいしい秘密を知っているんじゃないかって……」

マインが食事で何を残していたかなんて、わたくしは知りませんでした。

「他の知識があるなら、尚更早く来てほしいわ。そうすれば、少しでも良い契約相手を探すことができるもの」

……早く春になればいいのに……。

冬が始まったばかりだというのに、わたくしはそう思わずにはいられませんでした。

吹雪の季節が終わり、晴れた空が見える日が少しずつ増えてきます。外出を躊躇う日が少なくなる頃には春の洗礼式が行われました。

明るい部屋の中にチャリン、チャリンと金貨と金貨の触れる音が響きます。いつもならばとても心躍る時間ですが、わたくしは何だか金貨に集中できません。

「珍しく手が動いていないが……どうかしたのか、フリーダ？」

木札に何かを書き込んでいたおじい様はコージモに木札を渡し、わたくしを見ました。

「春になったのにマインが来ないわ、おじい様」



わたくしは金貨を置いて、窓辺へ近付きました。外を見れば雪が解け、白く染まっていた道が見えてきています。誰の目にも明らかな春がやってきました。それなのにマインは来ません。

「フリーダはずいぶんとマインを気に入っているのだな」

おじ様の言葉にわたくしは大きく頷きました。

「大人になっても同じ立場の子といられるのは素敵だと思うのです。……今までわたくしには別れしかないと思っていたから」

身食いとして生きるために貴族と契約をしたわたくしは、成人と同時に貴族街で生活することが決まっています。成人するまでは下町で過ごすことが許されていますが、家族、知人、住み慣れた家や生活習慣など、全ての繋がりを手放さなければなりません。一人で向かうはずだった貴族街で、下町出身の友人と過ごすことができるかもしれないのです。

「……ふうむ。そうか」

おじ様がしみじみとした声で言いながら背もたれに体を預け、ゆっくりと息を吐きました。しばらく何か考えていたおじ様が良いことを思い付いたようにフツと笑います。

「マインを農の養子にするか……？」

「おじい様!」

「旦那様、突然何をおっしゃるのですか!」

わたくしただけではなく、おじ様の右腕として働いているコージモも驚きの声を上げました。当然でしょう。思い付きにしてはあまりにも影響が大きすぎます。

「イルゼによると、マインは他にも新しいレシピを色々知っているらしい。それらの珍しい知識と引



き換えに養子縁組を申し出るのはどうだ？ 我が家の援助を付けやすくなるうえに、フリーダが契約しているヘンリック様と仲の良い貴族と契約することも可能かもしれない」  
養子縁組できれば、確かにオトマール商会から付けられる援助に大きな差ができます。それによつて友人ではなく、親族としてマインと貴族街で交流できるでしょう。

……なんて素敵！

嬉しくなつたわたくしと違つて、コージモは「旦那様」と厳しい声を出しました。

「旦那様の養子となれば、相続にも関係してくるでしょう。不用意な発言はお控えください」

「貴族と契約してすぐに貴族街へ向かうマインに相続など関係はない。たとえ何か言われたとしても、これまでの援助で相殺できよう。……それに、息子達と養子縁組をさせると、万が一の時にオトマール商会と切り離すのが難しくなる。儂ならばすでに引退している立場だ。店への影響は最小限に抑えられるだろう」

おじい様はオトマール商会を引退して商業ギルドのギルド長になりました。今ではオトマール商会のも者ではなく、ギルド長だと皆が認識しているくらいです。

「根回しだけはしておくが、どちらにせよ、マインがこちらに援助を申し出て来なくてはとうしようもない」

「それもそうですね」

マインがオトマール商会に協力を要請しなければ勝手に養子縁組はできません。

「それほど心配しなくても、マインが商業ギルドに来たら必ず儂に連絡するように言っておくし、ベンノを通して様子を尋ねておこう。フリーダはマインのことより、自分のことを考えた方が良からう。ギ



ルドの見習い仕事は慣れたのか？」

「ええ、おじい様。色々とお覚えることがあつて楽しいわ。わたくし、とても優秀だと褒められたのよ」  
わたくしも貴族街で生きていくためには自分の勉強もすっかりとしなければなりません。少し安心した心地になつて、わたくしは金貨を手に取りました。

雪は完全に解け、色々な植物が芽吹きました。ぐんぐん育つて緑が増し、花が咲きます。暖かな光の中を柔らかな風が吹き抜けていくのを感じていたと思えば、いつの間にか日差しは熱を持ち始め、夏の洗礼式が近付いていました。

それなのに、マインに会えることはありませんでした。商業ギルドに登録しているのですから、普通ならばお店の使いとして書類を持ってくるはずです。それなのに、ルッツもマインも商業ギルドには全く顔を出しません。

……もう命が尽きるまで半年くらいしかないではありませんか！　ここまでマインに会えないなんて、絶対にベンノさんの陰謀ですわっ！

そろそろギルベルタ商会に直接お邪魔した方がいいかもしれません。たとえベンノさんがどんなに嫌な顔をしてマインの命の方が大事です。

……どんな理由を付けてギルベルタ商会へ行こうかしら？

商業ギルド三階にあるカウンターの奥で見習い仕事をしながらそんなことを考えていると、少し遠くの方から聞き覚えのある声が聞こえてきました。

「書棚がわたしを呼んでいるんです」



「気のせいだ。呼んでない」

驚いて振り返ると、ベンノさん、マイン、ルッツがカウンターのところへ来ているではありませんか。我が家に運び込まれた時と違ってマインの顔色は良く、自分の足で歩いてベンノさんに何やら言い返しています。一緒にお菓子を作ったり、お風呂に入ったりしたただけで体調を崩していましたが、今日は商業ギルドへ足を運べるくらい元気なようです。

……やつと会えた！

ずっと待っていたわたくしはとても嬉しくなりましたが、マインはわたくしがここにいることに気付いていないようです。わたくしは手早く手元の仕事を終えると、教育係に「マインが来たことをギルド長へ連絡してください」と頼みました。

……今日は絶対に逃しませんからね。ベンノさんにも勝ってみせます。

一つ深呼吸すると、わたくしはカウンターへ向かい、マインに呼びかけました。少くくは悪いと思ってくれるように、手を腰に当てて不満そうに唇を尖らせて。

「あら、マイン。春が終わろうとしているのに、マインは全然遊びに来てくれないのね」

おわり